「御池の水」に見る名水の成り立ちに関する研究

京都大学大学院　学生会員　○松下　倫子　　京都大学大学院　正会員　出村　嘉史
京都大学大学院　正会員　川崎　雅史　　京都大学大学院　正会員　樋口　忠彦

1.　研究の目的

京都には他の都市に例を見ないほど多数の「名水」が存在し，それぞれが多種多様な性格を持っていた．これらの名水は江戸時代の地誌類で数多く取り上げられており，京都の水環境の多様性を知るための重要な手がかりとなっている．その中には，物理的に存在している水は重要視されておらず，その他の要因によって成立していた名水が数多く存在していた．本論は，複数の時代の史料中に記述のある「御池の水」に着目し，そのような名水が成立した過程およびその名水の持つ空間的特性を明らかにすることを目的とする．

2.　「御池」（竜躍池）の名の成立

平安時代から院政時代まで，「御池の水」は二条殿（押小路殿）の庭園内で園池の水源として用いられていた．平安時代の中～後期，平安京の北東部には貴族の邸宅が建ち並んでいた（**図 1** 参照）が，これは，この地域が豊富な湧水を得られる環境であったためと考えられており[1]，この二条殿もその地域内に位置していた．

図 1　平安後期の貴族の邸宅図
（京都市編『甦る平安京』参照，筆者作成）

二条殿は，池を中心とした林泉の美で知られ，別名「二条御池殿」とも呼ばれていた．二条殿の主であった二条良基の日記であると言われる『おもひのまゝの日記』には，山のふもとより湧き出で，岩の間を走り，島を浮かべた御池に流れ込み，山を隔てて五尺の高さの滝へ落ちるといったように，様々に姿を変えていく水の情景が描写されている．庭園内には起伏の激しい地形を造成し，自然の水の姿を再現しようと努めていた様子がうかがえる．

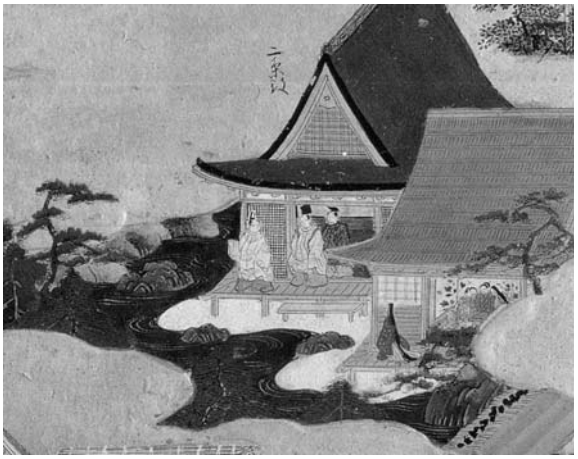

図 2　洛中洛外図屏風（上杉本）に描かれた二条殿
（小澤弘・川嶋将生著『「洛中洛外図屏風」を見る』河出書房新社　より転載）

さらに『おもひのまゝの日記』には，「水のうへに二かいをつくりかけたれば，やがて座の中をながれ行石間の水，さながらそでうつばかりなり」[2]とあり，これらの水の姿を眺めるための装置として，水の上に縁側を設けていたことがわかる．洛中洛外図屏風（上杉本）には，池を中心とした園池に向かって開かれた屋敷や，水辺に程近い縁側から，公家の人々が御池を眺めている様子などが描かれている（**図 2** 参照）．

また二条殿とその園池は，貴族文化の中で重要な役割を果たしており，「いづみもてあそび給ふ」として方違えの行幸が行われたり[3]，詩歌管弦の宴が開かれた[4]ことが当時の文献に記述されている．これらのことからも，当時の京において，この御池の水が名水として世に知られていたことが伺える．

以上のように，豊富な水量をもって水を中心とした林泉美を表現していたこと，また貴族文化と密接に関わる存在であったことから，「御池」の名とその湧水の名声が確立していった．

Key Words：　京都，名水，湧水，御池
〒606-8501　京都市左京区吉田本町　京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻　Tel＆Fax 075-753-5123

3.　御池の縮小・衰退

貴族社会において栄華を誇った二条殿であるが，応仁の乱により邸宅が焼失してしまい，その後，園内にあった御池は川を形成するようになる．

江戸時代初期成立の『老人雑話』には「…（前略）…老人幼少の時は，小池の跡遺れり．小池より泉涌出て四条へなかれ，今の月鉾の町より西へ流る」[5] とあり，また江戸時代（1684 年）成立の『菟芸泥赴』には「その水の流，中頃まで室町の中を流れて四条まで有し，それを紫川といひしとぞ．今は町中に埋み樋して，三条より南は東西の家の溝にかなる」[6] とある．つまり，二条殿の御池の水源となっていた湧水は，邸宅が焼失した後，紫川と呼ばれる川の水として利用されるようになり，更に後の時代には，この川の三条以南が埋められていたことがわかる．流路変更後の川の様子は，応仁の乱後を描くとする『中昔京師地図』にも描かれている（**図 3** 参照）．なお，平安時代から南北朝時代まで，紫川の流路には室町川と呼ばれた川が流れており[7]，御池の水を旧室町川の流路に流したものが，紫川であると推測される．

後の時代の地誌や絵図には，紫川は登場しないため，紫川は早い時期に消滅したと考えられる．そしてかつて御池を形作っていた湧水は，両替町久米氏の後園に，狭小な池として僅かに残されていた[8]．その後，この小さな池の傍に「御池の社」と呼ばれる弁財天の社がつくられ[9]（**図 4** 参照），湧水は祀られるようになる．

昭和初期（1933 年）成立の『京都民俗志』には，名水として「御池の水」が紹介されており，「室町通御池上る民家の内にある．…（中略）…地面の下に大きな凹地があって，その底に井戸がある」[10] とし，御池の水の一部が残ったものを井戸枠で囲っていた（**図 5** 参照）．これらの状況の変化から，平安時代から近代までの間に湧水量の減少があったことが把握できる．

このようにして御池の規模は縮小していき，湧水はかつての姿とは程遠い形となって存在した．

図 3　御池と紫川の様子（『中昔京師地図』に筆者加筆）

4.　地誌に登場する名水「御池の水」

江戸時代には数多くの地誌が登場し，京都の名水・名池などを盛んに取り上げるようになる．それらの一つ『名所都鳥』は，「御池」としてこの湧水を紹介し，「むかし二条殿此ほとりにあり．庭に山を築き．池をほるに水きはめてきよくひやゝかなり．二条殿夏は瓜を此水に浸してかならず禁裏に献る…（中略）…いにしへは池殿に十景ありとなん」と説明している．先に挙げた『菟芸泥赴』にも「御池」を「池嶋など見所有て作りて住給へり．御池の十景とてあり」と紹介している．

このように，地誌類では御池の水を説明するに当たって，その水の清らかさ，古の庭園に築かれた山や池に浮かぶ島など林泉の情景，その傍らの二条殿の存在や十景の存在，浸した瓜を献上する公家の文化などを紹介している．これらの地誌類が書かれた当時，この湧水は人家の内にひっそりと存在していた小さな池（もしくは井戸）にすぎなかった．しかし過去の風景のイメージや名声の存在によって，この水は名水として扱われていた．

← **図 4　御池の社**
（井上頼寿著『京都民俗志』より転載）

図 5　御池の水　→
（昭和初期，井戸となったとき）
（井上頼寿著『京都民俗志』より転載）

5.　結論

京都における名水の一つ「御池の水」は，江戸時代において，当時の水の姿や扱われ方にとらわれることなく，過去に確立されたイメージや名声をもとにして，名水として扱われていた．この場合，名水という存在は，人々が昔の林泉の風景を思い描くための装置としての働きをしていた．

1）日本庭園研究センター『庭園学講座Ⅴ　日本庭園と水』, 1998
2）～5）史料京都の歴史『下京区』，1981
6）『新修京都叢書　第 12 巻　菟芸泥赴』，臨川書店，1995
7）岸本史明著『平安京地誌』，講談社，1974
8）～9）史料京都の歴史『下京区』，1981
10）井上頼寿著『京都民俗志』，松田尚友堂，1933